

## 介護実習における学生の「やる気」の分析

谷 口 敏 代    柴 山 邦 子  
片 山 信 子    小 玉 美 智 子  
橋 本 祥 恵

### 要 約

介護実習のやる気を明らかにするために〇県立大学短期大学部健康福祉学科2年次の学生を対象に調査した。IGF法を用いて調査した結果、やる気を起こす・なくす双方に共通した理由には『ケアプラン策定』『利用者とのかかわり』『実習中の取り組み姿勢』『実習環境の把握』『介護技術』の категорияが分類された。中でもケアプラン策定に関するデータが多くみられたが、介護実習の目標に掲げられていることが反映していると思われる。また、今回の調査結果ではやる気を無くした理由の中にも、体調不良や実習による心身消耗の2つのサブカテゴリーで構成される『体調』の категорияが分類された。

学生全体のやる気曲線は実習初日から急激な下降・上昇カーブはみられないが、休日をはさみ緩やかな下降がみられ、実習後半には徐々に上昇し、実習終了日の終点は実習期間中で最も高いカーブを描いていた。

キーワード：介護実習、やる気、IGF法、実習指導

### I 序論

介護実習は、学内で学んだ介護を実在する生身の人間と接しながら実践・検証する過程を繰り返して専門職業人として育てていく大切な授業で、介護教育の授業形態として大きな位置を占めている。また、介護実習は学内の授業と人的・物的環境が異なり、利用者、施設指導者、寮母などあらゆる人々との相互理解と関係を深め実習を進めている。学内では受動的態度をとっている学生も利用者との日常を共にしながら自分のもっている知識や技術をフル活用し介護技術を提供しなければならない。学生自身の自主性や主体性が求められ、実習の取り組み姿勢が実習効果に影響しているのではないかと考えた。

また実習目的達成のためには、担当教員のみならず実習施設の指導者や関係スタッフが授業として成立するための働きかけが求められる。本校では介護実習を効果的に行うために施設指導者と学校教員はそれぞれの立場で指導助言することになっている。施設指導者はケアを行う場面を中心に指導を行い、介護技術はもちろんのこと、不安・緊張などにも適切なアドバイスを加える。担当教員は実習事前・事後の指導に加えて、原則として週一回以上実習場に出向き、学生と個別に面接をし学習への助言をすると同時に施設指導者とも学生の学びの問題点などについて相互に情報交換をし

て効果的な実習教育の調整にあたること<sup>1)</sup>にしている。しかし、介護実習の現場での実習指導者は施設により異なり寮母長・寮母・看護婦・生活指導員等その職種はさまざま、実習指導

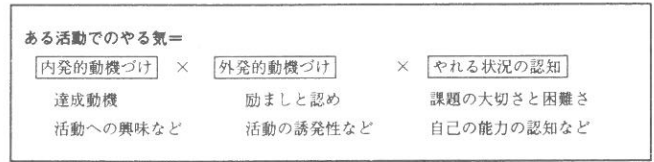


図1 ある活動でのやる気 (文献3より引用：一部改変)

者としての教育を経ず自分の体験を通し指導を行っているのが現状である。また、担当教員も実習施設の多さ、学内での授業調整等から学生一人ひとりに十分な指導環境を整えるために四苦八苦している。「やる気」という言葉は教育の現場でよく使われるが、心理学の研究では達成動機として扱われている<sup>1) 2)</sup>。しかし、ある活動に対してのやる気は図1<sup>3)</sup>に示すように、個人の内部の動機づけや外発的動機づけ、やれる状況の認知の3つの要因がお互いに影響し合っていると考える。学生自ら意欲的・積極的に実習を取り組もうとする動機や姿勢を施設指導者・担当教員が学生に向かってそのような状況になれるような状態に働き掛けることが「やる気」には含まれている。そこで、学生のやる気の要因を把握し介護実習の効果的な指導方法が得られるのではないかと考えた。

## II 研究方法

### 1. 対象

〇県立大学短期大学部健康福祉学科5期生2年次46名

### 2. 調査時期と実習概要

介護実習Ⅱ段階終了後の平成10年5月20日

介護実習Ⅱは介護過程の展開を中心とした実習で、第2年次前期(4月13日～5月15日)に特別養護老人ホーム、身体障害者療護施設で5週間(4単位180時間)の集中実習の形で実施している。前半の2週間では施設の日常介護業務に参加しながら受持ち利用者を中心に情報収集を行い、3週目の前半2日間(4月27日・28日)は学内実習を設けて介護過程のアセスメント・介護計画の立案と成文化を行う。後半の実習では介護計画に基づき実践・評価といった展開である。

### 3. 測定用具

石桁氏の開発したIGF法 (Inner Graphic Formula Method)<sup>4) 5) 6)</sup>を用いて調査した。学習のやる気を測定するためには客観的測定・数量化の妥当性が問われるが、このIGF法は教育社会学的立場でやる気というきわめて主観的なものをできるだけ主観的に調査し、その結果を被験者にフィードバックでき、しかも数量的に表現できるようにしたものである。調査用紙はグラフ用紙に自分のやる気の増減を描き、さらにやる気に変化したところにはその理由を付記するようになっている。グラフ図の横軸は時間経過、縦軸は自分のやる気度でパーセントで表示するようになっており、①記憶につながっている主観的なやる気がどのように変化していたかを示すグラフ、②やる気を起こしたときの理由、③やる気をなくしたときの理由で構成されている。

介護実習における学生の「やる気」の分析

表 1-1.やる気を起こした理由

| カテゴリ                                      | サブカテゴリー              | 特別養護老人ホーム   | 内 容   | 身体障害者療護施設 |
|---|----------------------|---|---|-----------|
| ケ<br>ア<br>ブ<br>ラ<br>ン                     | ケアプランの<br>計画過程       | 1W目・ケアプランの方向性が出た<br>2W目・ケアプランを立てているとき<br>・よりよいケアプランを策定しようと思ったから<br>・ケアプラン策定のための担当利用者を決めるため、よく観察しようと思った<br>・アセスメント表のチェックを始めたから<br>外出時、利用者の外の様子を観察でき、ケアプランに取り入れることができないかを考えることができたので<br>・受け持ち利用者を決めるので<br>・ケアプラン作成するために必要な情報収集できる最終日だったので、利用者や医療関係者から現在の状態を聞いた<br>3W目・ケアプラン作成に取り組み具体的な展開が見えた<br>・介護の定める目標があったから<br>・ケアプランを策定しているのだから<br>・担当利用者に本当に必要なケアプランを作らなければならぬと思った<br>・利用者のことを考えながら良いケアプランを立てようと思ったから<br>・ケアプランを立て後半の実習が始まったので<br>4W目・ケアプランが少しずつまとめられるようになり頑張るようになっていった<br>・ケアプラン立て直しのために頑張る気になった | 1W目・ケアプランを立てる人が決定し、情報収集するという気持ちが起こった<br>2W目・ケアプラン作成し実践したらどうなるかと考えると楽しいから<br>・ケアプランを考える過程でいろいろなことが思いついた  |           |
|   | ケアプランの<br>実践と結果      | 3W目・学校で考えたケアプランを立てて実行してみたいと思ったから<br>・ケアプランが完成した後、実際に実践できるかと思うと自然にやる気が出てきた<br>・情報収集し、ケアプランを立て介護を実践していくという難しいやりがい・責任のある実習をあたえられ<br>・実際自分が立てたケアプランを実行できると思うから<br>4W目・ケアプランで計画した差込便器で排泄された<br>・一生懸命立てたケアプランの中で実行したかったものをやる日だった<br>・ケアプラン作成し実行する事ははっきり認識して実行できた<br>・ケアプランが成功した<br>・体調良くなりケアプランが思うように進められた<br>・自分の策定したケアプランで担当者の生活に潤いができたので嬉しかった<br>5W目・ケアプラン実施の項目が実行できるので<br>・ケアプランがうまくいった<br>・実習残り少なくなり、ケアプラン実行し、結果を出したいと思ったから<br>・ケアプラン策定の結果が見られた  | 1W目・学内で立てたプランが実践できる期待<br>・ケアプランを実行しようとする気が出た<br>・ケアプランを実行しようと思った<br>4W目・苦勞して立てたケアプランを実践するとうまく進んでいった<br>・ケアプラン立てたことを考えながら行動した<br>・ケアプランが利用者に適応できているか確認できた<br>・ケアプランが計画通りに実践でき、利用者の笑顔が見られた<br>5W目・利用者がケアプランの内容に協力、実行できた |           |
| 利<br>用<br>者<br>と<br>の<br>か<br>か<br>わ<br>り | 利用者とのコミュ<br>ニケーション   | 1W目・利用者とのコミュニケーションが多くなった<br>2W目・受持ち利用者とのコミュニケーションがうまくいった<br>・利用者とのコミュニケーションがスムーズに行えるようになった<br>・利用者とうまくコミュニケーションがとれた<br>・利用者と受持ちと親しくなれて、コミュニケーションが楽しくなった<br>4W目・利用者としつこくコミュニケーションが図れ、接することができるようになった   | 1W目・利用者が話していることが聞き取れるようになった<br>4W目・利用者と話をするのが楽しみで休み明けが待ち遠しい<br>・利用者の名前と顔が一致し、コミュニケーションをとりはじめることができた<br>・他の利用者ともコミュニケーションが図れるようになった<br>・他の利用者ともコミュニケーションが図れるようになった   |           |
|   | 利用者の反応               | 3W目・ケアプランの対象者がやる気になってくれた<br>4W目・受持ち利用者が働きかけてくれるようになった<br>・利用者が積極的に反応してくれた<br>5W目・利用者がありがとうと感謝されたとき<br>・ケース担当者の方から自発的に挨拶して下さり、自分を頼りにしてくれた  | 2W目・利用者が大切な物を見せてくれ、信頼されていると思った<br>3W目・用者が体調悪く食事介助が必要となった時、指名してくれ手伝えた<br>4W目・連休後あなたが居なくて寂しいと言われ、再会の喜びが聞けた  |           |
|   | 利用者との外出や<br>レクリエーション | 2W目・レクリエーションで利用者の方と楽しめた<br>・チボリ公園へ行き、利用者の笑顔がたくさん見られた<br>・利用者としボリ公園に外出した   | 2W目・チボリでの花見があったので<br>・チボリでの花見があったので<br>・利用者としボリ公園に外出した<br>4W目・利用者としボリ公園へ外出してとても楽しかった  |           |

表1-2.やる気を起こした理由

| カテゴリ       | サブカテゴリ     | 特別養護老人ホーム   | 内容 | 身体障害者療養施設  |
|------------|------------|---|----|--|
|            | 利用者への親近感   | 5 W目・実習最終日に利用者と共に手形をとり、実習生という枠をはずれて心から楽しめた<br>・ケース担当者に対してやる気をもっていった   |    | 1 W目・ケース担当者が決まり仲良くなれると思った<br>3 W目・利用者と話すのが楽しみで休み明けが待ち遠しい<br>実習生とい 5 W目・担当利用者と慣れ親しみ、周囲の利用者にも目を向けた   |
| 寮母・教員とのかわり | 寮母の反応      | 1 W目・怒った利用者のことに、寮母さんが説明を加え気にしなくてもいいと言ってもらえた<br>・寮母さんがいろいろアドバイスしてくれ介護がつかめた<br>3 W目・寮母さんがケアプランに協力してくれた<br>4 W目・寮母さんが自分達のことを思ってくれたことが実感でき、頑張ろうと思った<br>・寮母さんに誉められた<br>5 W目・寮母さんに誉められた<br>・これからどうすればいいのかが明確になり、寮母さんが力を貸してくれたとわかったから<br>・寮母さんから自分で学ばなければ時間がなくなると言われ思い直してやる気ができた   |    | 1 W目・寮母さんとの関係でショックから立ち直れた  |
|            | 寮母の雰囲気     | 1 W目・担当寮母さんが明るく、楽しく実習できた  |    | 3 W目・寮母同士の人間関係を気にしすぎても仕方ないと聞き直った   |
|            | 担当教員の反応    | 4 W目・中野先生と一緒に考えてくれ応援してくれた   |    |  |
| 実習中の取り組み姿勢 | 実習取り組みへの決意 | 1 W目・実習開始し張り切っていた<br>・実習が始まるので頑張ろうと思った<br>・初日はやる気で燃えていた<br>・実習が始まるので頑張ろうと思った<br>・実習スタート時はやる気マンマンで実習に行った<br>・決意を新たに持ち、毎日いろんな事をしていこうと思っていた<br>2 W目・週の最初の月曜日は新たな気持ちで頑張ろうと思った<br>・これではいけないと思った<br>4 W目・自信をなくした後も、残りの週をしっかりとやろうと思いついてきた<br>5 W目・最終日となりやり残しのないように一日を過ごさなければならぬと思った<br>・最後まで頑張ろうと思った<br>・残りの1週間を頑張ろうと思った<br>・最終週やり残したことをやろうと思った<br>・悔いの残らない実習を頑張ろうと思った<br>・実習最後なので悔いの残らないように頑張ろうと思った<br>・悔いのない実習をしたかった<br>・良かったと思えるような実習に近づきたい<br>・体調不良で休んだ分を取り返そうと思った<br>・自分の努力したことを施設に残して帰らなかった<br>・反省会で指摘された所を取り戻そうと思った |    | 1 W目・希望していた実習施設なので前回にできなかった事を頑張ろうと思った<br>・実習2日目に不注意である事件を起こしてしまったが、頑張らなくてはいけなくて、泣き寝入りしてはいけない気持ちになった<br>5 W目・あと2日しかないと思った<br>・最後まで頑張ろうと思った<br>・残り5日だと思つとやる気が出た<br>・実習期日が少なくなり、どうしてもやっておきたいことがあった<br>・最後に頑張ろうと思った<br>・やり残したくないと思った |
|            | 実習内容への決意   |   |    | 2 W目・早出や遅出の実習があり、利用者の一日の生活を知れるという期待<br>5 W目・夜勤が初めてなので不安もあったが楽しみもあった  |
|            | 実習内容への期待感  | 2 W目・わからないことが多く、寮母に多くの質問ができた<br>3 W目・わからない時はその日のうちに解決しようと積極的に質問した   |    |  |
|            | 実習中の帰宅・帰校  |   |    | 2 W目・金曜日には家に帰れると思ったから<br>休みに近づくのと同時に学校に行けるのでやる気が出た   |
| 実習環境の把握    | 施設への慣れ     | 1 W目・施設に慣れた<br>・早く実習施設に慣れようとした<br>4 W目・施設に慣れてきた   |    | 2 W目・業務に慣れてきた<br>4 W目・施設の一日の流れがつかめた<br>5 W目・一日の業務の流れがつかめた  |
|            | 施設の特徴理解    | 1 W目・それぞれの施設には長所・短所があることが再認識できた   |    |  |
| 介護技術       | 介護技術の特徴理解  | 2 W目・施設の雰囲気慣れ、おむつ交換にも自信ができた<br>4 W目・シーツ交換が上手にできた<br>・自分の介護技術の向上が感じられのびのび介護できるようになった   |    | 1 W目・入浴の介助など少しでも動けるようになった  |
|            | 介護技術の実践    | 2 W目・介助させてもらえるようになった時<br>5 W目・実際におしめ交換をさせてもらった  |    |  |

#### 4. 調査手順

調査目的を記述した用紙を配布し、学生の主観的な判断により臨床実習期間中のやる気のカーブとその増減に対する理由の記入を求めた。データの正確性を期するためと今後の実習指導に役立てるために記名式とし、記入内容が実習評価には関係ないこと、実名をつけて外部に漏らすことはしないことを明示し協力を得た。

#### 5. 分析方法

- ①やる気をおこしたとき、無くしたときに記述された内容は、分析単位をセンテンスおよびそのパラグラフを代表するセンテンスを選択し、データ化する。
- ②記述されたセンテンスを表現、意味内容の類似性に基づいてカテゴリ化する。
- ③文脈が読みとれない場合は学生本人に確認し、明確にする。
- ④カテゴリを統合する。
- ⑤カテゴリ化の信頼性は共同研究者間で検討する。
- ⑥やる気のグラフは平均カーブを出し全体のやるき曲線のカーブを描きその推移を明らかにする。
- ⑦やる気曲線およびその理由を、実習施設別に検討する。

### Ⅲ 結果

#### 1. やる気を左右する理由

特別養護老人ホーム（以後特養と略す）31名、身体障害者療護施設（以後療護と略す）15名の学生の実習期間中に「やる気を起こした理由」からデータとした総センテンス数134、一人あたり平均センテンス数は2.9であった。実習施設別にみると、特養89（平均2.9）、療護は45（平均3.0）であった。その内容は表1に示すように『ケアプラン策定』『利用者とのかかわり』『寮母・教員とのかかわり』『実習中の取り組み姿勢』『実習環境の把握』『介護技術』の6つのカテゴリーと17のサブカテゴリーに分類できた。それぞれのカテゴリー、サブカテゴリー別に実習週数別のデータ出現にはバラツキがある。

『ケアプラン策定』のサブカテゴリーには「ケアプランの計画過程」「ケアプランの実施と結果」があり、『利用者とのかかわり』には「利用者とのコミュニケーション」「利用者の反応」「利用者との外出やレクリエーション」などがあつた。『寮母・教員とのかかわり』は「寮母の反応」「寮母の雰囲気」「担当教員の反応」のサブカテゴリーに分類されたが、「寮母の雰囲気」の内容としては「寮母さんの明るさ」や、「寮母の人間関係を気にしすぎない」の2項目が上げられた。『実習中の取り組み姿勢』は「実習取り組みへの決意」「実習内容への期待感」など4つのサブカテゴリーに分類できた。『実習環境の把握』は「施設への慣れ」「施設の特徴理解」、『介護技術』は「介護技術の上達感」「介護技術の実践」のそれぞれ2つのサブカテゴリーに分類できた。

カテゴリー別にデータ数の割合を単純集計し、施設別にみたのが表2である。データの多い順にみると特養では『ケアプラン策定』が32データ（36%）、『実習中の取り組み姿勢』22データ（24.7%）、

【利用者とのかかわり】16データ（18.0%）、【寮母・教員とのかかわり】10データ（11.2%）となっている。療護では【利用者とのかかわり】が15データ（33.3%）で一番多く、続いて【ケアプラン策定】【実習中の取り組み姿勢】が同数の12データ（26.7%）で次に【実習環境の把握】3データ（6.7%）、【寮母・教員とのかかわり】2データ（4.4%）、【介護技術】1データ（2.2%）となっている。

次に「やる気をなくした理由」についてみてみると、データとした総センテンス数122、一人あたり平均センテンス数は2.7であった。実習施設別にみると、特養75（平均2.4）、療護は47（平均3.1）であった。その内容は表3に示すように、【ケアプラン策定】【利用者とのかかわり】【婦長・寮母とのかかわり】【実習中の取り組み姿勢】【実習環境の把握】【介護技術】【体調】の7つのカテゴリと18のサブカテゴリに分類できた。「やる気を起こした理由」と同様に同じようにそれぞれのカテゴリ、サブカテゴリ別に実習週数別のデータ出現にはバラツキがみられている。

【ケアプラン策定】のサブカテゴリには「ケアプランの計画過程」「ケアプランの実施と結果」「ケアプランの指導」に分類されたが「ケアプランの指導」の内容としては「ケアプランがなっていないと先生に言われて落ち込んだ」<ケアプラン指導の順番を待っている時間が長く、もったいないと思った>「ケアプランを立てたが、主任から見る視点が異なっていると言われ、頭がぐちゃぐちゃになった」など、実習施設内・学校内での指導が上げられている。【利用者とのかかわり】には「利用者とのコミュニケーション」「利用者の反応」「利用者の外出」などがあり、【婦長・寮母とのかかわり】は「婦長の反応」「寮母の反応」「寮母の利用者への反応」「学生の印象」があった。「学生の印象」

表2 「やる気を起こした理由」カテゴリ一覧

| カテゴリ            | サブカテゴリ             | データ数 (%)   |            |
|-----------------|--------------------|------------|------------|
|                 |                    | 特養<br>n=31 | 療護<br>n=15 |
| I ケアプラン策定       | 1.ケアプランの計画過程       | 16         | 3          |
|                 | 2.ケアプランの実践と結果      | 16         | 9          |
|                 |                    | 32(36.0)   | 12(26.7)   |
| II 利用者とのかかわり    | 1.利用者とのコミュニケーション   | 6          | 5          |
|                 | 2.利用者の反応           | 6          | 3          |
|                 | 3.利用者との外出やレクリエーション | 2          | 4          |
|                 | 4.利用者への親近感         | 2          | 3          |
|                 |                    | 16(18.0)   | 15(33.3)   |
| III 寮母・教員とのかかわり | 1.寮母の反応            | 8          | 1          |
|                 | 2.寮母の雰囲気           | 1          | 1          |
|                 | 3.担当教員の反応          | 1          | 0          |
|                 |                    | 10(18.0)   | 2( 4.4)    |
| IV 実習中の取り組み姿勢   | 1.実習取り組みへの決        | 20         | 8          |
|                 | 2.実習内容への期待感        | 0          | 2          |
|                 | 3.実習中の質問           | 2          | 0          |
|                 | 4.実習中の帰宅・帰校        | 0          | 2          |
|                 |                    | 22(24.7)   | 12(26.7)   |
| V 実習環境の把握       | 1.施設への慣れ           | 3          | 3          |
|                 | 2.施設の特徴理解          | 1          | 0          |
|                 |                    | 4( 4.5)    | 12(26.7)   |
| VI 介護技術         | 1.介護技術の上達感         | 3          | 1          |
|                 | 2.介護技術の実践          | 1          | 0          |
|                 |                    | 5( 5.6)    | 1( 2.2)    |

には「明るさがない」「暗そう」「根暗」などの6項目があった。【実習中の取り組み姿勢】は「実習中の気のゆるみ」「実習中の葛藤」の2つのサブカテゴリに分類できた。【実習環境の把握】は「施設への慣れ」「施設の特徴理解」、【介護技術】は「介護技術の失敗」「介護技術の期待はずれ」、【体調】は「体調不良」「実習による心身消耗」のそれぞれ2つのサブカテゴリに分類できた。

介護実習における学生の「やる気」の分析

表3-1.やる気をなくした理由

| カテゴリ     | サブカテゴリー        | 特別養護老人ホーム   | 内容 | 身体障害者療養施設   |
|----------|----------------|---|----|---|
| ケアプランの策定 | ケアプランの計画過程     | 2W目・情報集めがうまくいかない<br><br>3W目・2時間かけて作成したケアプラン、精一杯やったつもりでも直す所がたくさんあった<br>・ケアプランを懸命に立てたが、情報不足など不十分で自分がやってきたことに否定されたようで自信をなくしたとき<br>・ケアプランがまとまらず、思いつかなかった<br>・カンファレンスの後、ケアプランがうまく立てられなくて気分が落ち込んだ<br>5W目・ケアプラン作成の時漠然とした情報が多く、細やかな点まで考えたとき必要な情報が不足していた |    | 2W目・ケアプランの情報が集まらなかった<br>・ケアプランが欠点だらけで嫌になった<br>・ケースについて悩んだ<br>・ケアプランがうまくできるかどうか不安だった<br>3W目・頑張ってたケアプランは無理なことが多く、利用者がみれていないことがわかった<br>・ケアプランと動きを考えて疲れた<br>・ケアプランがうまく立たない                        |
|          | ケアプランの実践と結果    | 3W目・ケアプラン実行にあたり、寮母さんが協力してくれなかった<br>・口堅くケアプランを立てたが、寮母に「この人はいい」と言われこれでもいいかと思うとやる気がなくなった<br>4W目・自分で立てたケアプランが利用者に向いていなかったため<br>・プランが思った通りにいかない<br>・プラン実行するが目に見えた変化はない   |    | 3W目・自分の立てたプランを利用者に拒否された<br>・担当利用者にケアプランを断られた<br>・ケアプランに対して利用者の同意が得られなかった<br>4W目・利用者が入院し、ケアプランが実践できなくなった<br>・ケアプランの失敗を自覚した<br>5W目・思うようにケアプランの実践ができず、偏ってしまっただけ<br>・ケアプランがうまくいかなかったから            |
|          | ケアプランの指導       | 3W目・ケアプラン指導の順番を待っている時間が長く、もったいないと思った<br>・カンファレンスの時ケアプランの視点がズレていると激しく指摘された<br>4W目・ケアプランを立てたが、主任から見ると視点が違っていると言われ、頭がぐちゃぐちゃになった<br>5W目・反省会の時、主任に実習態度、ケアプラン等厳しく指摘されたとき  |    | 2W目・ケアプランがないと先生に言われて落ち込んだ   |
| 利用者とのかわり | 利用者とのコミュニケーション | 1W目・利用者とうまくコミュニケーションがとれなかった<br><br>2W目・受持ち利用者とのコミュニケーションがとれない<br>・言葉かけがうまくいかない<br><br>4W目・やっととれたコミュニケーションが連休をはさみとれなくなった   |    | 1W目・利用者の言っていることが理解できず、いらだかせてしまった<br>・利用者とのコミュニケーションが図れず、アオ・バカと繰り返して言い訳不安になった<br>2W目・利用者の話していることが聞き取れず会話を利用者がやめてしまった<br>・自分の思いが利用者には十分伝わらなかった<br>・コミュニケーションをしても訴えてくれるだけで、少しも意見を言わそうとせず主張ばかりされた |
|          | 利用者への反応        | 1W目・突然利用者から怒られ、私の行動を寮母さんに陰口でいいふらされた<br>・利用者から要求にすぐ答えられず、利用者から怒られた<br>3W目・担当者の体調が悪く、一緒に居ることができなかった<br>4W目・他の利用者からやさしさを焼かれ、さみしい気持ちでいっぱいになったとき   |    | 4W目・約束をした利用者がリハビリに参加してくれなかった<br>・担当利用者の精神面が安定せず気を使いながら接した<br>・ケアプラン担当者が居眠りし、接することができない<br>5W目・利用者との関係が深まらず、どうしようどうにでもなれというわけの状態であった<br>・利用者Dさんに「おまえはきらい」と言われ続けたから                             |
|          | 利用者との外出        |   |    | 4W目・外出行事が終わってしまった   |
| 寮母とのかわり  | 婦長の反応          |   |    | 1W目・昼食がバラエティ食でとまどい、どう動いていいかわからなかった時、婦長さんに怒られた<br><br>3W目・婦長さんからいよみの入っている文句を言われた   |
|          | 寮母への反応         | 2W目・寮母から毎回同じように、質問が少ない、何がわかったか聞かれた<br>・担当寮母<br>3W目・質問しても寮母は迷惑そうにする<br>・寮母の協力が得られない<br>・担当寮母<br>4W目・担当寮母<br>・一生懸命策定したプランに対して寮母さんの協力が得られなかった  |    | 1W目・寮母さんが忙しく、困っていても放っておかれた<br>2W目・寮母にきつく注意された<br>寮母の話しから、学生のことをあまり良いように言っていないのが聞こえた   |

表3-2.やる気をなくした理由

| カテゴリ       | サブカテゴリー    | 特別養護老人ホーム  | 内容 | 身体障害者療護施設  |
|------------|------------|--|----|--|
| 姉長・寮母とのかわり | 寮母の利用者への反応 | 1 W目・寮母がおしめ交換をしていたとき「くさい」と利用者<br>者に聞こえるように言っていた<br>・施設理念と寮母の利用者に対するギャップをみた<br>4 W目・寮母さんが利用者にも暴言を吐いているのを聞いたとき   |    |  |
|            | 学生の印象      | 1 W目・明るさがない、若さを出してと言われた<br>3 W目・自分では頑張っているつもりだが、積極性がないと<br>指摘されたとき<br>・寮母さんから頑張りがないとと言われるたびに自信を<br>なくした<br>4 W目・いつも暗そうにうつむいていると言われた<br>・県短の学生は根暗に見えと言われ、途中から参加<br>した看護実習生と比較された              |    |  |
| 実習中の取組み姿勢  | 実習中の気のゆるみ  | 2 W目・休みがあるのでリラックスしてしまった<br>・休日が入った<br>・ゴールデンウィークでリラックスしてしまった<br>3 W目・学校に帰らだけてしまった<br>・学校の授業で気が抜けた<br>・連休に入るから<br>4 W目・連休疲れと業務の流れを取り戻すのに大変だった<br>・連休明けで気がゆるんでしまった<br>5 W目・終わらだと思うと気が抜けた       |    | 2 W目・休みの翌日でやる気が起きない<br>・休日が入った<br>・学校で友人に会い、気が抜けてしまった<br>3 W目・学校を休みたかった<br>・週末はやる気が出ない<br><br>5 W目・木曜日が反省会なので実習が終わった気がした |
|            | 実習中の葛藤     | 1 W目・観察することが多く、業務がうまくいかない<br>・見学ばかりでおもしろくない<br>・うまく動けなく落ち込んだ<br><br>5 W目・自分の気持ち・考えが思った通り職員に伝わらな<br>かった   |    | 1 W目・施設が忙しく担当寮母が誰か理解できなかった<br>2 W目・頑張ろうという思いはあっても何をしていたかわか<br>らなかった  |
| 実習環境の把握    | 施設への慣れ     | 1 W目・施設の雰囲気になれず疲れ果てた<br>・前の実習先の印象が強く実習先に慣れることができ<br>ない<br>2 W目・慣れて緊張感がなくなった  |    | 1 W目・一日の業務の流れがつかめない<br>・一日の流れを覚えるのに苦労した<br><br>2 W目・業務に慣れない  |
|            | 施設の特徴理解    | 1 W目・施設での介護の実態を知ったとき   |    |  |
| 介護技術       | 介護技術の失敗    | 2 W目・食事介助がうまくできず少ししか食べてもらえな<br>かった<br>3 W目・学生同士任せられたおしめ交換にもたつき、利用者<br>に不快感を与えてしまった<br>4 W目・入浴介助時、流れ作業についていけず、利用者の状<br>態を把握できず、利用者におわせてしまった   |    | 2 W目・入浴介助のチェアインバスで機械操作介助がちゃん<br>とできなくて失敗した<br><br>4 W目・自信がつけかけていた食事介助がうまくいかなかった<br>・利用者の食事介助が一番後になってしまった                 |
|            | 介護技術の期待はずれ | 1 W目・食事介助以外は利用者の居ない階で、一日中洗濯を<br>し、利用者とかかわれない<br><br>3 W目・介護業務以外のことが多い（トイレ掃除など）<br>4 W目・一日中掃除の日があった   |    | 2 W目・入浴介助のチェアインバスで機械操作介助がちゃん<br>とできなくて失敗した<br><br>4 W目・自信がつけかけていた食事介助がうまくいかなかった<br>・利用者の食事介助が一番後になってしまった                 |
| 体調         | 体調不良       | 1 W目・体調を崩した<br>・体重減少が著しい<br>・病気で気分が鬱状態<br>2 W目・寝れていた<br>3 W目・体調を崩し、病院に通った<br>・体調が悪かった<br>・風邪を引いて体調が悪かった<br>4 W目・体調不良のため<br>・貧血でしんどかった<br>・連日のバイトと実習の両立で体長が悪くなった<br>5 W目・体長を崩し、思うような介護ができなかった |    |  |
|            | 実習による体力消耗  |  |    | 1 W目・利用者や寮母に気を使い精神的・体力的に疲れた<br>・寮母の仕事が体力的につらい  |



介護実習における学生の「やる気」の分析

やる気を起こした理由と同様にカテゴリ別にデータ数の割合を単純集計し、施設別にみたのが表4である。比率の高い順にみると特養では『婦長・寮母とのかかわり』18データ(24.0%)、『ケアプラン策定』15データ(20.0%)、『実習中の取り組み姿勢』13データ(17.3%)、『体調』11データ(14.7%)、『利用者とのかかわり』8データ(10.7%)、『介護技術』6データ(8.0%)、最も低いのは『実習環境の把握』4データ(5.3%)であった。療護では高い順に『ケアプラン策定』が16データ(34%)、『利用者とのかかわり』11データ(23.4%)、『実習中の取り組み姿勢』8データ(17.0%)、『婦長・寮母とのかかわり』4データ(8.5%)となっている。続いて『実習環境の把握』、『介護技術』が3データ(6.4%)で一番低いのが『体調』2データ(4.3%)である。

「やる気を起こした理由」「やる気をなくした理由」双方に共通したカテゴリに『ケアプラン策定』『利用者とのかかわり』『実習中の取り組み姿勢』『実習環境の把握』『介護技術』がある。そこで、カテゴリを構成するデータ数に注目し、特養と療護に出現する比率の差を $\chi^2$ 検定を用いて検討した。結果、有意差がみられたのは『ケアプラン策定』のみであった( $p<0.05$ ) (表5)。

表4 「やる気をなくした理由」カテゴリ一覧

| カテゴリ            | サブカテゴリ             | データ数 (%)   |             |
|-----------------|--------------------|------------|-------------|
|                 |                    | 特養<br>n=31 | 障害者<br>n=15 |
| I ケアプラン策定       | 1.ケアプランの計画過程       | 6          | 8           |
|                 | 2.ケアプランの実践と結果      | 5          | 7           |
|                 | 3.ケアプランの指導         | 4          | 1           |
|                 |                    | 15(20.0)   | 16(34.0)    |
| II 利用者とのかかわり    | 1.利用者とのコミュニケーション   | 4          | 5           |
|                 | 2.利用者の反応           | 4          | 5           |
|                 | 3.利用者との外出やレクリエーション | 0          | 1           |
|                 |                    | 8(10.7)    | 11(23.4)    |
| III 婦長・寮母とのかかわり | 1.婦長の反応            | 1          | 1           |
|                 | 2.寮母の反応            | 8          | 3           |
|                 | 3.寮母の利用者への反応       | 3          | 0           |
|                 | 4.学生の印象            | 6          | 0           |
|                 |                    | 18(24.0)   | 4( 8.5)     |
| IV 実習中の取り組み姿勢   | 1.実習中の気のゆるみ        | 9          | 6           |
|                 | 2.実習中の葛藤           | 4          | 2           |
|                 |                    | 13(17.3)   | 8(17.0)     |
| V 実習環境の把握       | 1.施設への慣れ           | 3          | 3           |
|                 | 2.施設の特徴理解          | 1          | 0           |
|                 |                    | 4( 5.3)    | 3( 6.4)     |
| VI 介護技術         | 1.介護技術の失敗          | 3          | 3           |
|                 | 2.介護技術の期待はずれ       | 3          | 0           |
|                 |                    | 6( 8.0)    | 3( 6.4)     |
| VII 体調          | 1.体調不良             | 11         | 0           |
|                 | 2.実習による心身消耗        | 0          | 2           |
|                 |                    | 11(14.7)   | 2( 4.3)     |

表5 「ケアプラン策定」の特養と療護の関連 (%)

| 施設        | やる気        |            | 計           |
|-----------|------------|------------|-------------|
|           | 起こした       | なくした       |             |
| 特別養護老人ホーム | 3 2 (42.7) | 1 5 (20.0) | 4 7 (62.7)  |
| 身体障害者療護施設 | 1 2 (16.0) | 1 6 (21.3) | 2 8 (37.3)  |
| 計         | 4 4 (58.7) | 3 1 (41.3) | 7 5 (100.0) |

$\chi^2=4.6054$   $p<0.05$

## 2. やる気曲線

やる気は主観的なものであるため、学生ひとりひとり、個性的でまったく同じカーブはみあたらない。しかし、そのカーブにはいくつかのパターンがあった。5週間の実習期間を1週間単位に分割すると、①実習スタート時のやる気が実習最終日まで持続する型、②月曜から週の中盤にかけて穏やかな上昇がみられ、休日にかけてカーブが穏やかに下降するのを繰り返す型、③実習開始時のやる気が徐々に下降し、学校登校を挟みカーブが上昇する型、④実習開始時のやる気が連休開始まで緩やかに上昇し、その後緩やかに下降し、実習後半4週目の中盤から徐々に上昇する型、⑤休日や、学校登校日に関係なく、やる気が急激に上昇し、直ちに下降するカーブを何度も繰り返す型がみられた。また、実習初日と実習最終日のカーブをみてみると、実習初日のやる気が上昇カーブでスタートする学生は12人(26.1%)、反対に下降する学生は25人(54.3%)で、持続している学生は9名(19.6%)みられた。また、上昇カーブで実習最終日を迎える学生は31人(67.4%)で下降カーブで実習が終了する学生は4名(8.7%)で持続したまま終了しているのは11名(23.9%)であった。図2は実習中最もやる気を起こしたときを100%とし、最もやる気を無くした時を0%におき、やる気がどのように変化した

かをカーブに書かせたものを数値処理して平均カーブにしたものである。全期間を通してのやる気の平均は61.2% (SD7.8)で特養63.4% (SD8.4)、療護56.6% (SD9.0)で

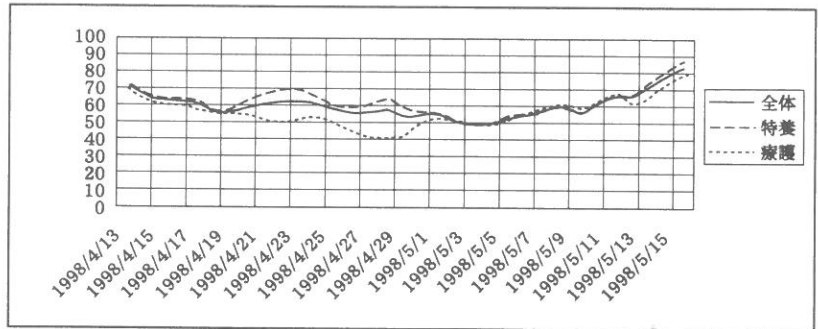


図2 やる気曲線

あった。学生全体を通したやる気は、実習初日(72.5%)から急激な下降・上昇カーブはみられないが、休日をはさみ緩やかな下降がみられ、実習後半には徐々に上昇し、実習終了日の終点は実習期間中で最も高い(85.0%)。特養もほぼ同じカーブを描いている。療護は実習開始時(70.4%)から緩やかに下降し、学校登校日以降緩やかな上昇カーブがみられるが実習終了日の終点が実習期間中で最も高くなっている(79.0%)のは療護と同様である。

## IV 考察

介護実習Ⅱの介護過程の展開を中心とした実習での学生の「やる気」を調査し、やる気を左右する要因を分析した。

やる気を起こす・なくす双方に共通したやる気を左右する理由には【ケアプラン策定】【利用者とのかわり】【実習中の取り組み姿勢】【実習環境の把握】【介護技術】の категорияが分類された。中でもケアプラン策定に関するものが特養、療護共に多く上げられていたのは、介護実習Ⅱの目標

に掲げられていることが反映していると思われる。言うまでもなくケアプランは介護をなしえるための系統的思考方法である。1年次に学習した知識を総動員し、アセスメント、計画、実施、評価という過程をたどらなくてはならない。学生にとっては生身の受持ち利用者に展開するのは初めての体験であるが、自分の作成したプランの展開を自分で確認できるため、計画過程や実践・結果の各段階でその内容結果に一喜一憂し、やる気を左右していると考ええる。また、担当教員・施設指導者は共に実習目標が達成できるように利用者に応じた介護目標の設定、それに伴う情報収集、介護計画の立案、利用者の自立・安全・安楽・経済性をふまえた介護技術の提供等を学生個々の進捗に合わせて意識的に指導している。その指導結果は学生のケアプラン策定に吸収されていき、ケアプラン策定過程のやる気を高めていると考ええる。しかし今回、やる気をなくした理由のサブカテゴリーに「ケアプランの指導」が上げられていた。その内容をみると、ケアプランの視点が激しくズレていると指摘された、みる視点が違っていると言われ、頭がぐちゃぐちゃになった、ケアプランを厳しく指摘された、ケアプランがなっていないと先生に言われて落ち込んだなどがあり、学生の行動を認めることなく否定するという指導がやる気をなくしていることがわかる。利用者に応じたケアプランが策定されないことは質の高いケアを提供できない。学習過程にある学生にはそのことを理解させ、ケアプランの方向性が間違っていたら頑とした姿勢で臨まなければならない。しかし、学生が策定したプラン結果を見てすぐに反応するのではなく、プラン策定過程の背後にある学生の気持ちや思いを十分配慮した指導が必要であることが示唆された。

実習ではあらかじめ設定されたアセスメント項目によってニーズを把握する様式を取り入れたアセスメントツール（厚生省老人保健福祉局監修の高齢者ケアプラン策定指針<sup>7)</sup>を使用した。幅広い内容のアセスメントからケアの方向性を見出すようになっているが、高齢者を対象としている。特養と療護のデータ数出現の比率に有意な差が見られたのは、青年期や成人期の利用者を受持った療護での実習生達にアセスメントツールが活用しきれなかったのではないかとということが考えられる。今後の課題としては実習施設もしくはアセスメントツールの選定を考慮しなければならない。

学生は介護技術の提供は受持ち利用者のもとより施設でかかわる利用者にも当然のことながら確実な技術の提供をしなければならない。介護技術の上達感や介護技術が実践出きるようになったときはやる気を起こしているが、介護技術が失敗したり利用者とかかわれなかったり、実習では想像していなかった施設業務に専念するような状況ではやる気をなくしている。他のやる気を左右する理由に影響しているとも考えられるが、データ数はやる気を起こす理由・なくす理由共に少なく今後、詳細な調査を行いたい。

寮母や担当教員、婦長による外発的動機づけに関する内容が抽出されているカテゴリーにはやる気を起こした理由に「寮母・婦長のかかわり」、やる気をなくした理由に「寮母・教員とのかかわり」がある。やる気が出る場合の内容を見ると、活動への取り組みを励まし、努力を認め、共に考え、誉め、学生のやる気に働きかけている。一方、やる気をなくした場合の内容は学生にとっては言語的・非言語的に否定されていると受け止めるような働きかけや、学生を鼓舞しようという意図で伝

えたようにしたことが学生の自尊心を傷つけてしまった内容が上げられている。叱咤激励したつもりが思わぬことに悩み、傷ついている学生もいる。学生個々の特性をふまえた指導をしなければならぬことが示唆された。

学生達は寮母・婦長・担当教員以外にも他の施設関係者、実習を共にするメンバーをはじめ、施設利用者等多面的な対人関係が求められている。あらゆる介護行為の基本には利用者との人間関係が問われるが、利用者とのコミュニケーションや利用者の反応がやる気を左右しているということからも、利用者とのかかわりは実習の中で大きなウエイトを占めていることがわかる。施設指導者や担当教員は学生が利用者との人間関係に不安やつまづきを感じていないかを把握し、そのアプローチ方法を工夫しなければならない。

また学生の内発的動機に関する内容には実習をやり通そうという決意や期待感、実習中に質問できた事への満足感や帰宅や帰校でのリフレッシュがやる気を高めていた。反対にやる気をなくしたのは、休日や帰校による気のゆるみや実習がうまくいかない事への葛藤などの実習取り組み姿勢が上げられた。介護実習Ⅱは5週間という長期間の実習形態である。学生の中には住み慣れた住居を離れ施設の寄宿舎で生活をしながらの学習形態を余儀なくされている。しかも学内の講義と異なり様々な要因が絡み合い学生は緊張の連続であることが想像される。心身が不調なときはやる気が起きないのは当然のことで、今回の調査結果でもやる気を無くした理由の中にも、体調不良や実習による心身消耗の2つのサブカテゴリーで構成される「体調」のカテゴリーが分類された。青年期にある学生は精神的発達に伴わず心身のバランスが伴わないことも考慮しなければならないが、学生自身の個人衛生とアルバイトなどは避け実習に専念できる環境を作り方に留意すると共に、実習環境に適応できるような働きかけも必要である。

次にやる気曲線の変動について考える。IGF法の縦軸の構成は学生個々の主観的なものである。従ってやる気カーブを各々の学生と比較することによって客観性を見出すことに無理がある。しかし、何百例とデータを集め、それを並べてみると共通性を見出すことができる。IGF法のねらいはやる気の時間軸の変化を知ることである<sup>8) 9)</sup>。調査したグループの変化する時期をつかみ指導に生かしたり<sup>10)</sup>、約1万人の大学生のデータからやる気の大きく変化する時期をつかんでいる<sup>11)</sup>。

今回得られた結果では、実習期間内の学生全体の平均カーブは平坦であるが、実習開始時よりも実習終了時の方が高い数値を示している。このことは実習最終日に向けてやる気が高まっていることがわかった。しかし、調査学生は1学年にすぎず、調査対象数は46名と少ない。今後の継続した調査が望まれる。

## V 結論

〇県立大学短期大学部健康福祉学科5期生2年次46名を対象に介護実習期間中のやる気を調査した結果以下の知見が得られた。

1. やる気を起こした理由からデータとした総センテンス数134、一人あたり平均センテンス数

は2.9で、『ケアプラン策定』『利用者とのかかわり』『寮母・教員とのかかわり』『実習中の取り組み姿勢』『実習環境の把握』『介護技術』の6つのカテゴリーと17のサブカテゴリーに分類できた。

2. やる気をなくした理由は、データとした総センテンス数122、一人あたり平均センテンス数は2.7で、『ケアプラン策定』『利用者とのかかわり』『婦長・寮母とのかかわり』『実習中の取り組み姿勢』『実習環境の把握』『介護技術』『体調』の7つのカテゴリーと18のサブカテゴリーに分類できた。
3. やる気を起こした・なくした理由双方に共通したカテゴリーを構成するデータ数に注目し、特養と療護に出現する比率の差を $\chi^2$ 検定を用いて検討した結果、有意差がみられたのは『ケアプラン策定』のみであった ( $p < 0.05$ )。青年期や成人期の利用者を受け持った療護では高齢者ケアアセスメント策定指針を活用しきれなかったことが反映していると思われる。
4. 学生個々のやる気曲線には①実習スタート時のやる気が実習最終日まで持続する型、②月曜から週の中盤にかけて穏やかな上昇がみられ、休日にかけてカーブが穏やかに下降するのを繰り返す型、③実習開始時のやる気が徐々に下降し、学校登校を挟みカーブが上昇する型、④実習開始時のやる気が連休開始まで緩やかに上昇し、その後緩やかに下降し、実習後半4週目の中盤から徐々に上昇する型、⑤休日や、学校登校日に関係なく、やる気が急激に上昇し、直ちに下降するカーブを何度も繰り返す型のパターンがみられた。
5. 学生全員のやる気平均カーブは、実習初日から急激な下降・上昇カーブはみられないが、休日をはさみ緩やかな下降がみられ、実習後半には徐々に上昇し、実習終了日の終点は実習期間中で最も高いカーブが描かれた。

## V 研究の限界

本研究のデータは質問紙によっており、実習終了時期に限定した中で、回答者に想起させたが、学生自身の想起できなかった面は記載されておらずデータとして抽出できないという限界がある。さらに今回使用したIGF法のやる気曲線尺度構成は個人が主観的に行っており、従ってやる気カーブを各々の学生と比較するすることに客観性を見出すことに無理がある。調査対象が46名と少なく、介護学生一般に普遍化することには限界がある。

最後に調査に協力してくれた学生に感謝します。

注

- 1) 岡山県立大学短期大学部生活福祉専攻：「介護実習要綱」

引用文献

- 1) 宮本美沙子：やる気の心理学、創元社、1995.
- 2) 下山剛：学習意欲の見方・導き方、教育出版、1996.
- 3) 福島侑美：やる気の背後にあるもの、教育と医学、36(6)、1988.
- 4) 石桁正士、岩崎重剛：I G F法による学生のやる気の研究（1）、日本教育心理学会第24回総会論文集、1982.
- 5) 石桁正士、岩崎重剛：I G F法による学生のやる気の研究（2）、日本教育心理学会第26回総会論文集、1984.
- 6) 石桁正士編：「やる気」の管理学、講談社、1989.
- 7) 厚生省老人保健福祉局老人保健課老人福祉計画課監修：高齢者ケアプラン策定指針、厚生科学研究所、1998.
- 8) 石桁正士：学生の体調とやる気、広島大学研究ノート、第64号、1986.
- 9) 川畑安正他：看護学生のやる気の変化－主観的なやる気の変化をグラフ化する試み－、看護展望、Vol.14、No.5、1989.
- 10) 谷口敏代：臨床実習における学生のやる気の変化、日本看護研究学会第22回学術集会、1996.
- 11) 再掲8)

〔平成10年10月30日受付〕  
〔平成10年12月25日受理〕